



©成田篤彦

#### アオアシシギ(シギ科)(写真右)

全長約30cm。ユーラシア大陸のツンドラ地帯などの湿地で繁殖。

ヨーロッパやアジア南部、オーストラリアなどで越冬

=2009年10月20日 木更津市(筆者撮影)



©成田篤彦

#### ドジョウを捕えたアオアシシギ

上総では4~5月、7月下旬~11月にかけて見られる。越冬するのもいる

=2008年10月6日 木更津市(筆者撮影)

夏から秋にかけて、いつになく多くの仕事を依頼された。その区切りがつき、ほっとした先月の中旬のことであった。あいにくの曇り空だったので、「撮影に行くのはやめようか?」と思った。しかし、ベテランのカメラマンが、曇り空の方がいい写真が撮れると言っていたのを思い出した。そこで、小櫃川河口に出かけることにした。しかし、午後になると雲が重くのしかかり、風が強くなつた。砂州の流木に身を隠して野鳥を待っていると帽子が吹き飛ばされそうになる。日が暮れて、次第に潮が満ちてきた。川波がさらに大きくなつた。すると、アシ原からハトの大のシギが川岸に現れた。前を歩く

ところだ。キアシシギか? だが、イソシギと比べるとはるかに大きい。くちばしがほんの少し上にそつて見える。ソリハシシギか? とも思った。野鳥の中でシギ類の分類は難しいといわれている。水鳥の写真を撮り始めてから日が浅い私にはなおさらだ。図鑑のあちこちを調べているうちに、脚が黄色に見えるが、くちばしは真っ黒、脚は長い。頭が小さく、スマートな姿から、「ひょっとして、アオアシシギでは?」と思った。早速、パソコンから、アオアシシギの写真を引き出してみた。背が赤味を帯びた灰褐色、腹が真っ白で、別な鳥のように見える。しかし、並べて比べてみると大きさや姿勢やくちばしの形がそつくりである。河口で見た時は、天候や周りの様子からくすんだ色に見え、すっかり、惑わされてしまった。念のために専門家に問い合わせると、「アオアシシギです。」と回答が返ってきた。「やはりそうか」と嬉しくなつた。しかし、アオアシとあるが、脚の色は灰色がかつた黄緑色にも見え、紛らわしい種名だ。

アオアシシギは上総でも普通に見られるシギであるが、数は少ない。主に春と秋に蓮田や河口に現れる旅鳥である。エサは水中の泥などにひそむハマトリムシ類や小型のカニ類やエビ類、小さな魚、昆虫類などである。ところで、1980年代の小櫃川河口では40~50羽の群れが見られたが、最近は数が減少している。シギ類でこの鳥ほど美しく澄んだ声で鳴くのは少ない

と、言う方もいるほど人々を魅力する野鳥である。それだけに、かつてのようだ。それに、かつての

# かずさの博物誌

## アオアシシギ

~清らかで秋のわびしさが漂う~

文・写真／成田篤彦

イソシギを追うように大股で水際を歩きながら、砂をつづいてエサをあさっている。「背が高い。脚が黄色だ。キアシシギか? だが、イソシギと比べるとはるかに大きい。くちばしがほんの少し上にそつて見える。ソリハシシギか?」とも思った。野鳥の中でシギ類の分類は難しいといわれている。水鳥の写真を撮り始めでから日が浅い私にはなおさらだ。図鑑のあちこちを調べているうちに、脚が黄色に見えるが、くちばしは真っ黒、脚は長い。頭が小さく、スマートな姿から、「ひょっとして、アオアシシギでは?」と思った。早速、パソコンから、アオアシシギの写真を引き出してみた。背が赤味を帯びた灰褐色、腹が真っ白で、別な鳥のように見える。しかし、並べて比べてみると大きさや姿勢やくちばしの形がそつくりである。河口で見た時は、天候や周りの様子からくすんだ色に見え、すっかり、惑わされてしまった。念

また、彼らは蓮田の畦に立ち、2羽が互いに口笛のような「ピイオ、ピイオ、ピイオ」と3連音の澄んだ鳴き声を何度もつなげて鳴きかわしていた。見通しのよい蓮田跡で見るこのシギのすらりとした姿と淡い色彩と鳴き声は清らかで物悲しさが漂つていた。

アオアシシギは上総でも普通に見られるシギであるが、数は少ない。主に春と秋に蓮田や河口に現れる旅鳥である。エサは水中の泥などにひそむハマトリムシ類や小型のカニ類やエビ類、小さな魚、昆虫類などである。

さて、収穫後の蓮田では秋から早春まで、1~2羽のアオアシシギが現れる。昨年は冬にも見られた。彼らは蓮田の中を長い脚でせわしげに歩きまわり、時々くちばしを口元まで泥にさしこみ、イトミミズのソリハシシギを引き出す。時には、ドジョウが長いくちばしにまきつき、すぐには飲み込めずに、泥水につけては、何度かくわえなおして、やつと頭から飲み込んでいた。面白いことにその瞬間、眼を閉じる。そして、ほほとのどが膨らみ、飲み込んだドジョウが体内を移動している様子がわかる。

彼らは蓮田の中を長い脚でせわしげに歩きまわり、時々くちばしを口元まで泥にさしこみ、イトミミズのソリハシシギを引き出す。時には、ドジョウが長いくちばしにまきつき、すぐには飲み込めずに、泥水につけては、何度かくわえなおして、やつと頭から飲み込んでいた。面白いことにその瞬間、眼を閉じる。そして、ほほとのどが膨らみ、飲み込んだドジョウが体内を移動している様子がわかる。